

ラジオ放送
＜令和7年4月～6月放送分＞

ON AIR



金光教の声

No.451

もくじ ～ contents

<先生のおはなし>

☞ 金光教の先生のお話です。

- 今、何を願うのか page 1
岡山県・本部在籍 金光孝悦
- どう生きていくのか（私の本棚から） page 5
兵庫県・阪急塚口教会 古瀬真一
- じいちゃんの従軍手帳（私からのメッセージ） page 9
兵庫県・曽根教会 島谷一久
- 今日も新しい命を頂いて（特選アーカイブス） page 13
大阪府・布施教会 村上宏明
- 「ありがとう」で救われた page 17
熊本県・日奈久教会 富永恵
- 親にものを言うように（私からのメッセージ） page 21
東京都・麻布教会 松本信吉
- 驚くな おどろくな（信心ライブ） page 25
- あの夏の涙 page 29
兵庫県・清滝教会 中村隆平
- 震災で学んだこと（特選アーカイブス） page 33
兵庫県・尻池教会 谷口惇子
- 継続の中で学んだこと page 37
大阪府・野田教会 丹羽晃
- 気づく力（信心ライブ） page 41
- 人生最後の試験（私の本棚から） page 45
大阪府・平野教会 宮下寿美
- 義父(ちち)の生き方を見つめて（特選アーカイブス） page 49
兵庫県・加里屋教会 井上憲親

《先生のおはなし》

「今、何を願うのか」

岡山県・本部在籍 金光孝悦こんこうたかよし

（案内役）おはようございます。案内役の大林誠はやし まことです。今朝は、金光教本部に在籍している金光孝悦さんのお話です。

私たちは何か困った問題にぶつかると、誰でも神仏に助けを求めたい気持ちになるものですね。でもそんな時、私たちは何をどうお願いするんでしょうか。

今日の話し手、金光孝悦さんは、まず問題の性質をよく見ることから始めてみたそうですよ。ではお聴きください。「今、何を願うのか」。

一 去年の夏、若い金光教の先生たちがスピーチするイベントが大阪で開かれることになり、私に出場依頼がありました。

初めは断るつもりでしたが、同じ金光教を信じている同僚から、「神様の願いが掛けられているのかも知れないよ。神様のお役に立つ良い機会だと思って出場してみたら」と言われ、悩みはしたものの、出場することに決めました。ですが、夏が近づくにつれて、私の家庭は経済的にどんどん苦しくなっていたのです。

私は当時、金光教本部のある岡山県で、妻と2人、賃貸住宅で暮らしておりました。家賃や生活費だけでもぎりぎりの暮らしてましたが、ちょうどその時期に車の修理や車検など、大きな出費が重なったのです。毎日をいかに節約して

過ごすか、不安が押し寄せてくる中に、大阪まで行かなくてはならない。旅費は作れるだろうか。宿泊はどうしよう。初めての大阪、せっかくなら、イベントの出場だけでなく、観光もして、ご馳走も食べて楽しみたいと、夫婦で胸を躍らせていたのに、それどころではなくなってしまうした。

暗い気持ちのまま過ごしていたある日、自宅の神棚の前に座り込み、「神様、何とかしてください」と不安を吐き出しました。神様の前でいろいろ考えていると、ふと「神様のお役に立つ良い機会だ…」という同僚の言葉を思い出したのです。

その瞬間浮かんできたのは、「私がこういう状況になることを、神様は初めからご承知だっ

たのではないか」ということでした。「ご承知でありながら、神様は、私に大阪でお話する機会を与えられた。他に若い先生がたくさんいる中で、神様はわざわざ私を選んだ。神様選ばれて、神様のお役に立つために、私は大阪に行くのだから、きっと神様が何とかしてくださいはずだ」。そう思えると、なんだか安心感に包みこまれたような、力が抜けていく感覚がしたのです。

私はこの思いを妻に話しました。するとその日を境に、それまでは不安や心配ばかりだった夫婦の会話が、「神様は何を期待してくださいっているのかな」「選ばれたのはすごいことかもね」と、だんだんと明るく神様の話ができるようになりました。

そうして妻と楽しく話をしていることに気づいた時、「そうか、心配や不安で悩む時間を頂いたおかげで、夫婦で神様の話ができて、一緒に困難を乗り越えられる夫婦に育ててもらっているんだな」「神様は、夫婦が成長するための経験を下さっている。私たちのことを思っている」「今」なんだな」と、今度は「ありがたいなあ」という気持ちで湧いてきたのです。

「神様が私たち夫婦を思い、願いを掛けてくださったの『今』であるのなら、これ以上、悩んだり不安で考え込んだりする時間は要らないな」と思えました。それから、「不安な心を改められますように」「夫婦と一緒に、神様の思いに応えられますように」と、日々願うようになりしました。

そうしたある日、身に覚えのない郵便物が届きました。開封してみると、何と、大阪の高級ホテルのペア宿泊券だったのです。それは以前、クレジットカードを作った時、自動的にキャンペーンに応募されていたらしく、私は応募されていたことすら知らなかったのですが、それがまさかの当選だったのです。この夏に、しかも大阪で、夫婦で利用できる高級ホテルの宿泊券を頂いた。私には、神様が下さったとは思えません。そしてさらにイベント当日、主催者側から、旅費を頂けることにもなりました。全く予想していなかった展開に、ただ畏れ入る思いでした。

私たちは、神様から、「助かってほしい」「幸せになってほしい」という願いを掛けられ、導

かれて「今」を生きていると思うのです。だから困難な問題に直面しても、神様が私のために下さっている「今」に、安心して身を任せていきたい。そして、自分の願望を神様に押しつけるよりも、神様の願いを受け止めることに力を入れて、問題に向き合っていきたいと思います。その先には、私たちの想像を超えた、神様が準備してくださっている助かりや幸せが待っている。それが私の実感です。

（案内役）いかがでしたか。始めは不安だったけれども、これも神様のお計らいだと気づけば、不安が自然と感謝に置き換わっていったといいます。そして神様の願いに素直に応えようとしていくと、そのご褒美なんでしょうか、思いが

けないうれしいことも起こってきたという。

私も、いろんな出来事の中に込められた神様の願いに、素直に従っていききたいなあと思いました。それで高級ホテルのペア招待券が当たるかどうかは分かりませんけどね。

神様もお喜びくださり、自分もうれしいようなするしがきつと現れる。そんな確信をもらえる今朝のお話でした。

《私の本棚から》

「どう生きていくのか」

兵庫県・阪急塚口教会 古瀬真一

おはようございます。兵庫県、金光教阪急塚口教会の古瀬真一と申します。

人間、生きている間には、これ以上はないというほどの、つらく厳しいこと、腹立たしいこと、悲しいこと、心配でなくなるようなことが、思いがけず降りかかってくることがありますよね。その時、あなたはどんなふうに生きていくでしょうか。

今日は、私の本棚から、1998年3月に金光教教誨師会から発行された『ともに心をひらいて―教誨教話集―』という本を持ってきま

した。

ご参考までに、「教誨教話集」という本の名前にある「教誨」という言葉。これは、「教え諭す」という意味です。「チャーチ」の「教会」とは違う字を書きます。刑務所や少年院などでは、ボランティアの宗教者が、収容されている人の希望に基づいて施設に出向き、物事の捉え方や考え方、人との関わり方などを調べ、改めていく助けとなることを願って、「宗教教誨」が行われています。その、宗教教誨に取り組む金光教の先生たちが、宗教教誨の場で話されたものをまとめたものが、『ともに心をひらいて』というこの本です。今日は、その中から、長崎刑務所で活動されていた酒井満信さんによる「人を責めない生き方」というお話を一部抜

粹して紹介したいと思います。

お話は、こんな状況から始まります。酒井さんが奉仕している教会にお参りしていた信者さんの娘さん、中学１年生が、交通事故に遭いました。塾帰りに横断歩道を渡っていた時、脇見運転の車に跳ね飛ばされ、頭蓋骨骨折、右半身打撲、意識不明に陥っていました。事故の２日後、加害者が見舞いに訪れたというところからお読みします。

＊

加害者本人が、お母さんに土下座して謝られました。その時にお母さんは、「その心でどうぞ助かるように祈って下さい」と言われたのです。まわりにいた人たちが、「なぜもっと怒らないのか、なぜもっと責めないのか」などと言

われたそうです。それらを聞きながらお母さんは、「あー信心していて良かった。どうしても責める心が起こらなかった。責めたところで、自分も助からないし、子供も助からないし、相手も助からない。意識不明ではあるけれど、子供はまだ死んだわけではないのだから、それよりも助かる方へ気持ちをもっていきたい。その様な気持ちになるのも信心のおかげだ」と思われたそうです。加害者の方はそれに甘えてか、あまり誠意がみられませんでした。しかしお母さんは、最後まで相手を責めることはありませんでした。幸いにして二週間ぐらいで段々と意識が戻ってきました。９９パーセントだめだろうと言われていましたが、助かっていく方へ向かっていきました。脳の手術や足の手術など、い

ろいろと大変な状態の中で、そういう痛々しい姿を見ながらも誰も責めず、また、自分は信心しているのにどうしてこういう事になったのだろうかと思うこともありませんでした。

いつも教会に来て話を聞いていたお母さんは、『こういう事が起こらないように願い、またこういうことになった時にどう生きてゆくか、というところに信心の勘所がある』、というをよく理解していました。厳しい中を、「今日一日、どう生きてゆくか」が信心のしどころなのです。このお母さんが、誰も責めないで、自分は信心していてよかった、と言えるのは、こういう大きな難儀の中で、自分の中に神様を頂き、頂いたその神様に対し、自分はどう生かされていくかを、一心に求めているから

だと思います。お母さんは、「私は加害者の立場をそれほど深く考えておりません。それよりも、子供が助かって欲しいということで精一杯でした」と言われました。回復してきた子供自身もまた、加害者を責めませんでした。ただその現実の問題について、心は神様に向かっていました。大変な中であって、ものが言えるようになった、手紙が書けるようになったと喜んで、治療に専念しました。誰が悪いというのではない、仕方がない、なったものはなった、というような事を言っていました。そう思えるのが有難いと、毎日神様にお礼を言い、金光様にお参りしていてよかったと、言われました。

さらに、同じように交通事故で入院し、意識の回復しない子供のことを、「先生、〇〇ちゃ

んがまだ意識が戻らないから早くよくなるようお願いして」と、自分も重体の中で、人の事を願うようになりました。「人を責めない」生き方をすすめてもらえ、大きな働きへと発展させていかれました。その生き方は、家庭を助け、お医者さんを助け、看護婦さんを助け、病人を助け、もちろん私を助け、まわりを助ける働きへと展開していったのです。

※ラジオ放送用に変更を加えている箇所があります。

表記は原典に基づいています。

＊

いかがでしたか。

大切な娘さんの命が危ういという中であつてもあたふたせず、今の思いを一つひとつ神様に向けながら、難儀の中をしのいでいかれたこの

お母さん。その肝の座わったご信心に心を打たれました。「仕方ない。なつたものはなつた」として、娘が助かることをお願いしながら目の前のことに取り組んでいく「誰も責めない生き方」。降りかかってきた出来事を受け入れられず誰かのせいにして、いつまでもモヤモヤしがちな私を救ってくれたお話です。

誰かの何かを責めるのはやめて、「自分は、こんなふうになんかされて生きたい」という思いを軸にして、神様が用意してくださる展開を楽しみにして生きていきたいものですね。

《私からのメッセージ》

「じいちゃんの従軍手帳」

兵庫県・曾根^{そね}教会 島谷^{しまたに}一久^{かずひさ}

今日は私のじいちゃんの話を書いてください。

皆さんの中には、今ワクワクしてお過ごしの方もいらっしゃると思います。また「今それなりに生活できているが、果たして自分の方向がこれで良いのかな」と、ちよっぴり不安な方もいるかもしれません。もしかすると「自分がどこに向かって進んでいったら良いか分からない」と迷子状態の方も。

もしもあなたが自分と人とを比べているとしたら、ずっと迷子のままかもしれません。比べ

るのではなく、日々、過去を振り返り自分を見つめ、方向を定めては進んでいく。そんな生き方があるのです。

親族で集まった食事会の時のことでした。

叔父が「実はこないだ仏壇を掃除したんだけどな。仏壇の中からあるモノが出てきたんや」と言いました。

銀行の通帳？　ヘソクリ？　もしかして隠し財産？

ハタと皆は言葉は止め、息をのみ、次の言葉を待ちました。

「出てきたのは、日記手帳だったんだ」

叔父が仏壇から発見したのは、祖父が戦争へ行っていた時の古びた従軍手帳。

「これでじいさんが言っていた意味がやっと

分かった。じいさん朝晩必ず仏壇の前に座って

たろう？ お線香つけて、チーンて鳴らして、

独特の節回しのお経あげて。真面目にやとつ

たなあ。昔な、それを俺とか他の家族が冷やか

すように『じいちゃん熱心やなあ』て言ったこ

と時々あったんや。そしたら、じいさんがな、

『ワシは仏さんを拝んでんやないんや、自分自
身を拝んどんねん』っていつも言うてたんや。

それが手帳を仏壇の中から見つけて読んだんや
けどな。じいさんのあの言葉の意味がやっと分
かったわ」

太平洋戦争で兵隊として中国に行った若かり
し祖父は、ある時、戦地で盲腸に。現地の病院
での手術はうまくいかず、負傷者として帰国の
途に就くこととなりました。従軍手帳には当時

の気持ちがあったためてありました。

治療のため日本へ送り帰され、家に戻り治療
に専念し回復。その後祖母とお見合い、養子と
して婿入り。

しばらくして2度目の召集令状が届くも、当
時の混沌とした社会情勢のせい、また丁度養
子入りしたばかりで所在地が分からなくなつて
いたのか、再度の徴兵を免れ、そのまま終戦。

そうです。祖父の「自分自身を拝んでいる」
とは「あの時再び徴兵されていたら死んでいた
かもしれない、今の自分の命は当たり前じゃな
い。今、衣食住が出来ていることは当たり前じゃ
ない」と。

そして、亡くなった戦友たちを思い「自分だ
けが生き残った。だからこそ、彼らに恥ずかし

くないように生きていきます。彼らの分まで生きていきます。忘れません」。これを毎朝毎晩、自分に言い聞かせ、真つ当に生きてきている自分なのだという意味だったのです。

そう慕わしげに語る祖父の言葉に、私は優しくなった祖父を思い出し、ぐっと胸が詰まりました。

祖父がまだ元気な頃、家族の一人が不幸のどん底状態となり、さらに追い打ちをかけるように、いわれもない訴訟が起こされたことがありました。

この時、祖父は手を拡げるようにして家族の前に立ちほだかり、相手から家族を守り通し、裁判を無事終えてからも、時間をかけて家族と共にそのどん底状態を通り抜けていきました。

「今家族と共にあるのは当たり前じゃない」という思いがそこかしこに。

夕食時、晩酌で酔いが回ると必ず戦争の話。ポロポロ涙をこぼしました。「おじいちゃんまた泣いてる!」。子どもだった私はそんな祖父の姿を面白がってたのを覚えています。あの涙の中には、自分だけ生き残った自責の念もあったのではなかったか。

祖父の葬儀の際、祖父の友人が声を上げて泣く姿や、思い出話を語る姿に、祖父が周りの人をも大切にしていたことがよく分かりました。

病気で悩んだ人が元気になる。いのちが助かる。どうなるか心配に思った人が、思いがけない解決を頂いて安心する。私たちはそれを「神様のおかげを頂いた」と心底から喜び、「この

「ご恩は生涯忘れません」と本気で思います。

でも忘れます。忘れまいと必死に自分に鞭打つこともあります。それは息切れがするばかりか、周囲の人にも迷惑をかけてしまいがち。ではどうすればいいのでしょうか？

今日一日だけ忘れない。過去自分のうれしかったこと、つらかったことを思い、その何が大切な、だからこそどう生きていきたいか自問自答し、生きる方向を定めるのです。

今日一日、これを心にかけて生活することはできる。

そして、次の日目覚めたら、また今日一日。忘れないように心がける。日々がさら、毎日にちにちが新しい。これを重ねていくこと。これが「自分を拝む」ということ。

そうしながら、いろんな事を通っていくうちに、気がつけば、まさかこんな自分になれるなんてと、心震える感動が続いていく、神様に感謝の気持ちが湧き続いていく。その姿を金光教教祖は「我ながら喜んで、わが心をまつれ」と仰っています。

私は今、金光教の教師となり、祖父と同じように、今生きていることの不思議さや尊さを、朝晩手を合わせては、今ここを確認し味わい、今日を生きます。自分を拝むということは、心の内なる神様の声を聴くことなのかもしれないと私は思うのです。

《特選アーカイブス》

「今日も新しい命を頂いて」

大阪府・布施^{ふせ}教会 村上^{むらかみ}宏明^{ひろあき}

(平成7年1月11日放送)

皆様、おはようございます。今朝は、今から7年前、私の父ががんを克服した時のことをお話しいたします。

当時61歳だった父は、風邪をこじらせて敗血症を起こし、生命に危険があるために緊急入院しました。担当医の診断は、血液に入った風邪の菌が体内のどこかの臓器に居座り炎症反応が消えないとのことでした。それから2カ月余り、父の体がやせ衰えるほどの徹底的な検査が続きました。そして、肝臓にうみがたまっていると

言われ、さらに詳しい検査の結果、ついに肝臓を切除する手術を受けることになりました。

それは、私たち家族が想像する以上に大きな手術で、肝機能低下や大量出血、血液製剤の輸血による感染症や合併症の心配があり、さらに新鮮な血を緊急に輸血するために、父と同じAB型の、それも若くて元気な男性を十人以上集めてほしいとのことでした。

手術の日がいよいよ迫り、その前夜に、麻酔科の医師から父と私は呼び出され、「万全を期するが、このような大手術は極めて強力な麻酔を使います。そのため外科的な手術の成功いかにかわらず、麻酔のために永遠に目の覚めない可能性もあります。最善を尽くしますが、万が一の場合は責任は取れません。それでもよ

ければこの承諾書にハンコを下さい」との説明を受けたのです。

病院側としては当然の対応でしたが、手術間際にはなんともやりきれない気分で、承諾書に印鑑を押して、私たちは麻酔科を後にしました。父を車いすに乗せ、シーンと静まり返った病院の暗くて長い廊下を歩く私は、目から涙があふれてあふれて仕方がありませんでした。絶対に大丈夫、と心に言い聞かせながらも、手術は成功するのだろうか、父は助かるのだろうか、いたたまれぬ思いに襲われました。病室に帰っても涙を見せてはいけない、暗い顔をしてはいけないと懸命に平静を装いましたが、たぶんどこちない顔つきだったのでしょう。せめて今夜は少しでも父と一緒にこの病室にいたいと思

い、しばらく付き添うことにしました。その時です。私はふと、ある方の話を思い出しました。

その方は、数年前、胃がんの宣告を受けられ、もはや生きる元氣も衰えて、恐怖と不安でたまらない心境になりました。ところが、何げなくテレビで大相撲中継を見ていた時、ああそうか、この元氣な力士たちでも明日の命の保証はどこにもない。明日も必ず生きていと約束されている人は誰もいない。でも、今、生きているじゃないか。ならば、命に感謝し、今日を大切に生きよう。そう思われた途端、その方は急に元氣になられたというのです。

気がつくと、私はベッドに横たわる父にこの話をしていました。尊い命を神様から頂き、生かされて生きているということは、とうに理解

している父でしたが、その時改めて父と私は手を握りあい、今、生きているんだ、今日の命を頂いているんだ、と親子で喜び合い、語り合い、励まし合いました。父の目にも私の目にも、うつすらと涙が浮かんでいました。そして、不思議と手術への恐怖も不安も薄らいだのです。「明日の手術は絶対大丈夫だ。神様は悪いようにはなさらないからなあ」「私もずっと神様に祈り続けるから、お父さんも頑張つて」

私たちは、今、命あることを語り合うことによって大いに元気づけられました。

翌日の手術は、10時間近くにも及ぶ大手術でしたが、学校や会社を休んで待機してくださいました方々からは一滴の輸血も受けることなく、手術は無事成功しました。手術の結果はまぎれも

ない肝臓がんでしたが、摘出された肝臓を見せていただいた時、ああ、これが父の体内で60年余り、一日も休むことなく働き続けてくれたのか。そう思うと、がんに冒されたその肝臓に私は手を合わせて拝まずにはおれませんでした。

父は、入院前より元気になり、生かされて生きている喜びをかみしめながらやがて退院いたしました。その元気のせいでしょうか、およそ3分の2も切除した肝臓が、1カ月後には元の大きさに復元していました。

そして早7年。父は毎朝、今日の新しい命を頂いた喜びを顔いっぱいにはこぼせて、元気に「おはよう」と声をかけてくれています。

父のこの手術を通して、私は単にがんを克服したことだけを喜んでいるわけではありません。

打ちひしがれてしまいそうな命に関わる大きな問題に直面した時でも、今、現に生きているんだ、そして今日の命を頂いているんだと喜びを語り合い、支え合い、励まし合うことが、どんなに生き生きと生きる力を与えてくれるか、それを身をもって教えられました。今日の命への感謝と、今日をどのように生き生きと生きるか、それが大切なのではないでしょうか。

今、病氣と闘いながら私のこの話を聞いてくださっている方がおられるかもしれません。しかし、今、私の声があなたに届いている、それは紛れもなく今日の新しい命を頂いておられるからでしょう。夕べ眠る時には、今朝、目覚めるという保証はどこにもなかった、でも目覚めることができたのです。それは決して当たり前

ではない、大変ありがたいことなのではないでしょうか。

今日も生かされて生きる喜びを実感し、たとえ病氣を抱えていても、年老いていても、命を生き生きと生かしていきたいものです。そして、その生きる喜びを、さらに語り合い、支え合い、励まし合う輪を広げていくではありませんか。

尊い命を、ありがとうございます。そして、今日も新しい命を、ありがとうございます。

《先生のおはなし》

「『ありがとう』で救われた」

熊本県・日奈久教会 ひなぐ 富永恵 とみながめぐみ

（案内役）おはようございます。案内役の大 おお
林誠 はやし まこと です。

今朝は、「『ありがとう』で救われた」というお話を聴きいただきます。話し手は、熊本県にある金光教日奈久教会、富永恵さんです。

2017年12月、待望の第一子、娘を出産しました。環境や仕事柄、これまでたくさん子どもたちと接してきた経験もあったので、自分の子育てもなんとかなるだろうと思っていました。

しかし、実際には、想像をはるかに超えた大変さに戸惑うことばかりで、私の子育ては、早速、暗く長いトンネルに入ってしまったのです。

私という人間は、自分のできる範囲のことは一生懸命するけど、苦手なことは徹底して避けてきたという人生でした。何を試してもうまくいかない子育ては、逃げ出したくても逃げ出せない大きな挫折でした。

それでも、神様に助けていただきながら少しずつ何とかなってきた頃、第二子、息子を出産しました。

喜ばしい中にも、娘の赤ちゃん返り、極度の偏食、夜泣きが重なり、いつまで続くかわからない負のスパイラルに、私の心は再び、暗く長いトンネルへと入ってしまったのです。

そんなタイミングで市の3歳児健診があり、保健師さんに悩みを相談すると、娘を保育園に通わせつつ、保育園から週に1回、療育施設へという提案を受けました。

娘はいろんな面で成長してくれていましたが、思ったことは何でも言葉にしたり、うれしさと興奮して大声や金切り声が出たり、夢中になると周りが見えない特性がありました。そんな娘に対する周りの反応を、私が過剰に気にしてしまい、大声で叱る場面が多々ありました。

信心をさせていただいて、どれだけ子どもたちの成長に神様から助けていただいているか、頭で理解し、お礼の気持ちももちろんありました。それでも、日々の暮らしの中では、思い通りにいかず、イライラや不満、不安が募り、そ

の状況を受け入れきれず、そこから怒りに変わってしまう自分に幾度となく落ち込んでいたのです。

そして、いつしか、「これは私の性格なんだから仕方ないんだ」と諦めかけていました。それが昨年の5月までの私です。

そういう状況の中、夫が、「ありがとうを言い合える家庭作り」という取り組みを始めることにしました。

私は朝、子どもたちを起こすことも長年の悩みの種となっていたのですが、夫のありがとうを言う取り組みの様子を見て、私自身も「ありがとう」と声に出して取り組みを始めてみました。そして、朝目覚めること、それこそ命があつてのことで、「神様ありがとうございます

ます」だと思わせていただき、ありがとうを言うことで、今まで気づけなかったことがたくさんあることを分かっていただきました。

そして、毎朝起きてくれるだけでも「ありがとう」だと思うと、そのことから、私の起こし方が「そうね。眠いよね。起きてくれてありがとうね。学校毎日頑張って偉いね」などと優しい口調で何度も「ありがとう」と言えるようになりました。

すると、子どもたちがニコニコ顔で機嫌良く起きてくれたんです。驚きました。1回のこともと、毎朝試してみました。結果、毎朝機嫌良く起きてくれるようになったのです。

そして、それ以上に驚いたことは、「ありがとう」を口にしていた私の心が誰よりもありが

たい気持ちになっていたことです。今までは、

「思い通りにならないことも、自分の心が育つために神様が下さった『差し向け』として大切に受け入れていくことが大事」だと教えていただいたので、子どもたちの問題も一生懸命受け止めようと努めてきました。しかしそれでは、ただ我慢して受けていることも多く、ストレスが溜まり、いつの間にか腹を立てている自分がありました。それが、「ありがとう」に取り組むようになると、同じ受けることでも、「ありがとう」に繋がるように物事を捉えることで、喜びが伴っていたことに気づかされました。そこから喜ぶことが信心だなの思わせていただき、私にとっては大きな変化でした。

今では、起こしに行くことも楽しみになり、

子どものあらゆる行動や反応全てを愛おしいと思え、自分の心が助かっていることを実感しています。

取り組み始めてから、2カ月ぶりに会った実家の家族からは、私の変化に「人が違うみたい」と驚かれました。そして、以前より家庭の中に笑顔が増えたのです。

まだまだ、何事にも「ありがとう」を言う稽古の最中です。けれど、イライラと不満や、不安の日々だった私の心は、同じ状況になっても喜びの心に繋がりがやすくなり、長年悩んでいたことへの視点が180度変わるおかげを頂きました。

だから今、伝えたいのです。皆さんもまず、何事にも「ありがとう」を言うことから始めて

みませんか。

（案内役）いかがでしたか。子どもを授かったのも、元気にいてくれるのも、神様のおかげだと、頭では分かっているけど、イライラがありがたさを打ち消してしまうことがある。それが子育ての現実ですよ。そんな時、「ありがとう」を声に出して言うことで、神様のおかげを再確認でき、自分の心が和らぐと同時に、子どもさんの心まで和んでいったと富永さんは言われます。

実験には説得力がありますね。私は「ありがとう」をどれだけ言えているかなと、考えさせられました。

《私からのメッセージ》

「親にものを言うように」

東京都・麻布教会 あざぶ 松本信吉 まつもとしんきち

あなたは「信心つていったい何だろう？」と
思ったことはありませんか？

金光教祖の教えに「信心といっても別にむずかしいことはない。親にものを言うようにすれば、それで信心になる」というものがあります。

今日は、大学時代からの僕の親友のK君の話をします。今、僕も彼も58歳です。

僕は都内の金光教の教会に生まれ育ち、徒歩20分のところにある大学に進みました。そしてテニスサークルに入りました。

時は、バブル景気のまっただ中、大学生は夏

はテニス、冬はスキーの時代です。

K君と僕は大学のそのテニスサークルで出会いました。K君はひょうひょうとした性格で、人懐っこく、テニスは僕と同じぐらい下手くそで、「オレはハンサムで身長もあるのに、どうして彼女ができないんだろう」といつも自分ですべてを言っていました。確かに憎めない、いいやつなんです。彼女はなかなかできませんでした。

大学3年になると僕たちはサークルの幹部になりました。テニスが上手かった友人が会長になり、K君と僕は副会長になりました。K君は事務作業が得意だったので事務的な分野を、そして僕は宴会部長を主に務めました。サークルはテニスのレベルは低く、弱かったのですが、当時、80人ほどの部員がいました。テニスの練

習時間や試合の連絡を電話連絡網で伝えることがK君の担当でした。

僕の家は大学から近かったので、電車で1時間半かけて通学していたK君は、1限の授業のある前の日はよく僕の家泊まりました。僕の部屋で床を並べて寝る時にいろんな話をしました。K君は、中学生の時、お父さんを病気で亡くしていました。K君は僕に親友になってほしいと言いました。僕はK君の親友になりました。

当時、教会長をしていた僕の父も幼い時に父親を亡くしていて、K君と時々話をするがありました。K君と父は、父親を早く亡くした寂しさを共感し合い、語り合いました。父は小学生の時に父親が病死しており、母親と兄弟はいましたが、小さい頃から心細かったこと。そ

して尊敬する信心の師匠が父親代わりになって、守られて育ててもらったこと。師匠から、「神様を親のように思っていれば安心になる」と教えられたことなどを話していました。K君はいつしか父のことを慕うようになっていました。

そして大学4年の就職活動の時、K君はサークルの先輩が就職した大手の建築会社の営業に早々と内定しました。しかし、その後大学の就職課の先生から、ある都内の大学が事務職員を募集しているから受けてみないか、と言われました。就職課の先生は、K君が営業より事務職に向いていると考えていました。その話を聞いてK君は迷いました。サークルの先輩のお世話になって、建築会社の内定をもらっていたから

です。そのことを僕に相談してきたので僕は彼に、「お取次とりつぎを頂いてみれば？」と言いました。

金光教の教会には、悩みなどを神様に申し上げ、神様の思いを伝えてもらう「お取次」というものがあります。

K君は父にお取次を頂きにきました。K君は、父が信心の師匠にお取次を頂いて救われたことを覚えていたのです。親にものを言うように神様に縋すがればいいんだと。父はしばし神様に祈り、「受けてみなさい」と言いました。K君も本心ではそれを望んでいました。そしてK君は大学の事務職員に合格しました。僕もK君は建築会社の営業より大学の事務職が合っていると思いました。

しかし先に建築会社の内定が出ていたので、

そちらを断らなければなりません。サークルの先輩にお世話になって内定していたこともあり、K君は、「コーヒーを浴びせかけられてもいいから建築会社を断ってくる」と言っ出ていきました。そして、何とか内定を断ることができて、大学の事務職員になりました。

彼は仕事もよくやりますが、若い時は、冬は毎週末、スキー場へ通うほど活動的でした。根はまじめでコツコツと仕事をするタイプなので着々とキャリアを重ねて、三十数年経った今では、彼はその大学の事務の管理職となり、部下も50人近くを抱えています。僕とK君は今でも時々飲みに行き、好きな鉄道と写真について話します。

スキーで知り合った奥さんと結婚し、一戸建

ての家も構え、お子さん2人も育てました。そして彼は、「あの時、お取次を頂いてなかったら、今の自分はないだろう」と語ります。

そして彼は今でも、時々、教会に参ってきま
す。

さて、信心というものには、計り知れないほど奥深いところもありますが、かといって初めから難しく考え、とても自分のような者にはできないとあきらめてしまつては何も始まりません。「親にものを言うように、お礼を申し、お願い申しなさい。それで信心になる」と言われています。

親にものを言うように神様に語るようにすれば信心になる、というのが金光教の信心です。

さあ、あなたもお近くの金光教の教会を訪ね

てみてはいかがですか？ 今日あなたの一日が素晴らしい一日になりますように。

H A V E A N I C E D A Y !



《信心ライブ》

「驚くな おどろくな」

(ナレ) おはようございます。今日は、愛知

県・金光教幅下はばした教会の石黒眞樹いしくろ まさきさんが、2022年12月22日に金光教本部でお話しされたものをお聞きいただきます。

私がどうにもならない問題に直面した時、聞かせていただき、助けられたお話です。

(石黒) 「驚くな おどろくな 君驚くな 道の真は動かざりけり」

「時々驚くことの出来るは我らが心磨けとのこと」

教祖直信ちくしんの佐藤範雄さとうのりお先生が129年前のたぶん今

日か昨日か、この時期にお歌いになった歌でございます。ある先輩の教話で、この2種のお歌を聞いたのは、昭和56年のことでありました。その時私は23歳。

大学を出たばかりの私は、大阪のある教会で、修行生の真似事のようなことでございますけれども、置いてもらうことになりました。金光教学院(教師養成機関)にはまだ行っておりませんので、何も分かりません。

しかし、私の父がその(修業先の)親先生にどうしても、この私を育てていただきたいと強く願いまして、無理なところを頼み込んでお世話になったようなことでございました。ところが私が入所してほどなく、その親先生がご病氣になられて入院してしまわれます。

そして親先生は40歳の若さでお隠れになって（亡くなって）しまわれました。冒頭にお話しした先生と、その二種のお歌に関してのやりとりというのは、そうした中での出来事でありました。私にとっても激しい衝撃で、驚くな驚くなどと言われましても、ただただ驚くほかはありませんでした。

しかしその親先生は、入院される前のある日、お広前の隅に慣れない黒衣を着て座っている私に、こういうお話を教えてくださいました。

若い頃には、見抜き見通したとか、神様からお知らせが頂けるといった特別な力に憧れるものだが、僕は勘が強いほうで、子どもの頃には道の角から犬が飛び出してくるぞと分かったし、学院生の頃は今日は誰かの下駄の鼻緒が切

れるぞと感じて、参拝するのに鼻緒を持って行ったらその通りだったとか、そういう前もって先に感じるようなことは、いくらでもあるものだ。けれどもそれは、御用には関係ないんだ。

例えば、こんな話がある。教職を持たない奥様が、ある教会のお広前で留守番をされていた。そこにご信者さんがもう駆け込んでこられて、大変な問題のお取次を願われた。教会長は不在だ。どうしたらよいか。どう声をかけたらいいのかわからない。その奥さんは必死でご祈念した。すると、そのご信者さんに、「助かった。おかげを頂いた」と連絡が入ったという話がある。僕は、そういう姿勢の教師になってほしい。こういうお話でございましたが、私はこのお話をどう頂けばよいのか、よく分かりませんで

した。

一心不乱にご祈念することの大切さを言おうとしているのか、人の思うことの強さのことか、ずっと分からなかったのであります。しかし、受け止めるということと考えてみたら、合点が行ったのです。この奥様が、「何もよりによって私が留守番をしている時に、こんな難問のお届けがあるなんて」と思うのと、「何の力もなく人を助けるなんてことできない。こんな私が留守番の時に、神様はこの困難を抱えた氏子をお差し向けになった。それは、この氏子の助かりのために、今日この時この私にその御用に立てよと、神様が思し召しになられてのことだ」と、腹を据えたのでは大きな違いがあります。たとえばどのような驚くことがあっても、しっか

りと受け止めて、わがこととして向き合う態度が必要だということでありましょう。自分の力で何とかしようとするのではなく、受けに受けしていくことで、自分の思いや力を超えた、想定外の神様のお働きが現れるのでありましょう。

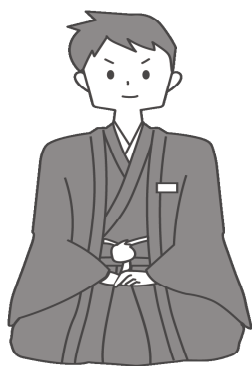
親先生は、そういう志を持った者になってくれ、そうなれるような稽古をしてくれと仰ろうとしたのだと、今は思っております。私が御用を頂いております教会では、一人ひとりの心の受け物を広やかにするという願いを立てて、受け物、器を作る稽古をしております。

先ほどのお歌に歌われた、心を磨くということとは、この器を作っていくということに通じることだと思っております。

(ナレ) いかがでしたか。

私も、思いがけない役目を負うことになり、思いどおりにならないことがありました。その時このお話に出合い、

「驚くなおどろくな君驚くな道の真は動かざりけり」「時々驚くことの出来るは我らが心磨けとのこと」というお歌を何度も繰り返し繰り返し自分に言い聞かせました。そうしているうちに、たとえば驚いたり、理不尽なことがあっても、「まずは、受け止めてみよう。何か意味のあることなのかもしれない。この先を楽しむにしてみよう」。そんな気持ちにさせてもらえるのでした。



《先生のおはなし》

「あの夏の涙」

兵庫県・清滝教会

中村隆平

（案内役）おはようございます。案内役の大
林誠です。

今日は兵庫県、金光教清滝教会の中村隆平さんによる「あの夏の涙」というお話です。中村さんは高校3年の夏、神様と出会って「なりた
い自分を発見できた」と言われます。どんな出
会いだったのでしょうか。そしてその時、何を
思ったのでしょうか。

今から28年前の夏、高校3年生の時、私は勉
強が大嫌いで、勉強をする意味も分かっていな

かったので、卒業したら就職してお金を稼ぎ、
一人暮らしをして自分の好きな物を買いたい、誰に
も迷惑をかけずに自由な生活がしたいと考えて
いました。しかし、何もやりたい仕事がなかつ
た私は、「大企業で週休2日の会社に就職した
い」と、曖昧な考えしかなかったため、進路指
導の先生に怒られていました。そんな時、ある
人からキャンプに誘われました。

実は私、曾祖母ちゃんの代から金光教の信仰
をしている家で生まれ育ち、小さい頃から金光
教三田教会の「みつばちフォーゲル隊」という
青少年育成団体の集会に参加していました。春
はハイキング、夏はキャンプ、秋はバドミント
ン、冬はスケートなど、年上のフォーゲルリー
ダーと一緒に遊んでくれましたので、家でも学

校でもない「第3の居場所」と感じるほど、居心地の良い環境で楽しく過ごしてきました。

誘われたのは高校生年代を対象としたソアリングキャンプでした。岡山県の金光教本部で夏に開催され、宿舎に泊まって布団で寝られて、食事も作ってもらえたので、はつきり言ってキャンプではないですね。無言で山に登ったり、ひたすらトイレ掃除をしたり、神様や自分のことを深く考えていく修行のような怪しい合宿でした。高校2年生の時に初めて参加したのですが、毎年参加していた楽しい野外キャンプとは違っていたので、「なんでこんなことせなあかんねん」と、意味が分からないまま終わった経験がありました。なので、再びキャンプに行く必要は全くなかったのですが、実は嫌なことば

かりでもなかったんですね。そのキャンプで東京や名古屋、広島、山口など全国にいるフォーゲルの仲間と初めて出会い、各地の方言がとても面白くて、世界が一気に広がったような気もしました。そして何より、私のように文句を言っていた人ばかりではなく、真剣にプログラムに取り組み、目をキラキラさせ、私よりイキイキと楽しく生きている人達が沢山いたのです。私は何だか負けたような思いにもなっていました。

ですから高校生最後のソアリングキャンプは複雑な思いで参加しました。単純に「友達にまた会いたい」という思いが強かったのですが、「あの面白くもないプログラムをまたやるのか」と、嫌な思い出も蘇ります。しかし、キラキラ

と輝く他の同級生達のことにも気になり、「私も何かを感じて帰りたい」という思いも密かに抱いていました。

高校生の私は、神様の存在を信じておらず、あまり考えたことがありませんでした。でも、もし神様がおられるなら、「自分に向いている仕事を教えてほしいな」という素朴な思いはありました。私は生まれて初めて真剣に神様をお願いしてみようと思い、教祖様のお墓の前で「生神金光大神様」という御神号を、ただひたすら一心に唱え続けるプログラムに取り組みました。「生神金光大神」というのは教祖様のお名前ですが、教祖様にお願ひすれば天地の神様にも通じると教えられていたからです。

最初は勢いよく大声でお願いしていました

が、何分経っても神様からのお返事はありません。「自分は何をしてるんやろう…お願いしても意味ないわな」と、いろんな思いが湧き出てきます。□では必死に唱えながら、キャンプの中で「自分と繋がっているもの」は何かという課題に取り組んだことを思い出し、知らず知らずのうちに、「生きるには一番何が必要かランキング」をずっと考えていました。両親や兄妹、友達や学校、バスケットボール、自転車、電気、水道、ガス、家、音楽、お金、名前、体、性格、心。「何がないと私は生きられへんのやろう？」と考えていると、ふと「そうや！天地がないと一秒も生きられへんわ」と思いました。その瞬間、目の前がパーツと明るくなって私はボロボロと泣いていました。

自分でも信じられないようなことでしたが、17年の人生の中で、心の底から生きていてありがたいと感じる瞬間を味わいました。「どんな仕事が自分に向いているのか？」そんな疑問は些細なこととなり、悩んでいることすらありがたいと思える自分になっていました。やりたい仕事は見つかりませんでした。「この幸せな気持ちを毎日感じられる人になりたい」という、なりたい自分が見つかったのです。

（案内役） いかがでしたか。

生きていくには何が必要か。中村さんもしろんな例を挙げていますが、一つとして欠かすことができず、一つとして自分の力でできたものはないんですね。いわば天地が総掛かりで自分

を生かしてくれている。それに気づいた時、その不思議さとありがたさに、中村さんは底知れぬ感動を覚え、これが神様なんだと悟ったんですね。

中村さんは、天地に生かされるこの喜びを、多くの人と分かち合いたいと願うようになり、今は金光教の教師として、神様に奉仕する日々を生き生きと送っています。

《特選アーカイブス》

「震災で学んだこと」

兵庫県・尻池^{しりいけ}教会 谷口惇子^{たにぐちあつこ}

（平成17年1月12日放送）

平成7年1月17日未明、大きな地震が発生しました。阪神淡路大震災です。あれから、早10年の歳月が流れました。あの地震では6433人の掛け替えのない尊い命が失われ、多くの家が全壊、全焼し、電気、水道、ガス、道路、鉄道など、いわゆるライフラインが壊滅的な被害を受けるという大惨事になりました。

私たち夫婦が奉仕する金光教の教会は神戸市の長田区^{ながた}にあり、一瞬のうちに全壊しました。

地震発生の時、夫は神前で信者さんのことを祈

っていました。突然爆風のようなものに飛ばされた後、崩れてきた天井の下敷きになりました。その横には大きな梁^{はり}がずれ落ち、横たわっていました。もしも飛ばされていなかったら、その梁をともに受けて、夫はどうなっていたでしょう。まさに九死に一生を得た出来事でした。

私は、夫とは別室にいて、タンスなどの下敷きになりました。天井が抜け落ち、泥や砂が降ってきた時には、もう死ぬかもしれないと思ったのですが、大したけがもせず、本当にもったいないことでした。

あのような状況の中ではちよつとしたことが人の生死を分けたと言われていますが、あの時、夫や私が命を落としていても少しも不思議であ

りませんでした。そんな状況の中で、がれきの向こうから夫の声が聞こえてきた時は、「神様、ありがとうございます！」という言葉が口を吐いて出ておりました。

しかしその後、一步教会の外に出た途端、その言葉は凍りついてしまいました。家という家はほとんど倒れ、多くの人が家の下敷きになって亡くなられたり、生き埋めになっておられたからです。また、あちらこちらで火の手が上がっていて、水が出ないために燃えるに任せるという最悪の光景が目に見え込んできました。そのような時、自分は助かって良かった、ありがたいというようなことは到底思えるものではありませんでした。私は震災に遭遇し、人の生と死に関わる神様の働きについて、心の整理がつか

かないままの時を過ごしていました。

そんなある日、教会長である夫から次のような話を聞き、神様の働きについて一つの安心のようなものを得ました。

私たちの教会にお参りしていたあるご夫婦が、あの震災で亡くなられました。ご夫婦は1階寝室で寝ておられたのですが、地震で2階が1階に落ち、その上に火事に見舞われたのです。2日目に焼け跡からご夫婦の遺骨がたくさん見つかり、娘さん家族の胸に抱かれたのですが、その中に、まるで手をつないでいるような形の不思議な遺骨があったそうです。それを見つけた娘さん家族は、「おじいちゃんとおばあちゃんの手をつないで亡くなっている。おじいちゃんがおばあちゃんをとっさにかばった時、手を

つないだに違いない。悲しいけれど、おじいちゃんとおばあちゃんは、おかげを頂いて、一緒に神様のところに行ったんだ」と言われたのです。

私はその話を聞いた時、そこに神様のぎりぎりのお守り、お働きを感じないではいられませんでした。あの時、信心する人、していない人の区別なく、神様は何とか救い助けようとされて、あらん限りのお働きを一人ひとりの上に現わしてくださっていたのではないのでしょうか。私たちが信仰させていただいている金光教では、「神は人間を救い助けようと思っておられ、この他には何もない」「人間が助からなければ神も助からない」と教えられています。このように私たち人間をいとし子として見ておられる

神様が、死に直面している人をじつと手をこまねいて見ておられるはずがない。一人ひとりに寄り添って、何とか助けたい、何とか助かつてくれよと懸命に働いてくださっていたに違いない、と思えるようになりました。

こういう形で亡くなっていかれることは限りなく悲しいことです。しかし、残された人たちがその中にも神様のぎりぎりのお働きがあったのではないかと感じていくことができれば、残された人たちの心が助かっていくことになるのではないのでしょうか。そしてそれは、そのまま亡くなられた方々の^{みたま}霊も助かることになるのではないかと思うのです。

あの大地震直後、被災地は被災者同士が我がことを忘れてお互いを助け合う風景でいっぱい

でした。そして行政の働きや全国から駆けつけてくださるボランティアの人たちの有形無形のご支援を頂き、どれほど助けられ元気づけられたでしょうか。

どなたに頂いたのか、励ましのメッセージ入りのお弁当を避難所のコンクリートの床に敷いた毛布の上で涙を流しながら頂いたこと、全国から消防車が駆け付けてくださったにも関わらず、水が出なくて道端に待機し続けられ、「どうぞ頑張ってください」と私たちを励ましてくださったことなど、忘れることができません。

今改めて当時のことを振り返ると、人々の真心やお世話になったこと一つひとつが、私たちを救おうと力の限り手をさしのべてくださる神様のお心、お姿に重なって見えるのです。

多くの人々や家や食べ物、仕事など、いろいろなものに支えられ、生かされて生きている私たちです。その背後にある、神様のお心に目を向け、再び頂いた命を大切に、人が助かるお役に立たせていただきたいと願っております。

《先生のおはなし》

「継続の中で学んだこと」

大阪府・野田^の教会　丹羽^に晃^{あきら}

（案内役）おはようございます。案内役の岩崎^{いわさき}弥生^{やよい}です。

今日のお話は、金光教野田教会・丹羽晃さんのお話で「継続の中で学んだこと」。それでは、お聴きください。

皆さんは今、何か続けていることはありますか？

今日は、「続ける」ということの大切さについて話したいと思います。

柔道、剣道、茶道、華道など、「道」と名が

つく稽古事には、技術だけではなく礼儀や生き方を学ぶという意味があり、初めは分からなくても、道を歩み続ける中で分かるということがあります。

私自身、いろいろと続けてきた中から、中学時代の話を紹介したいと思います。

中学校に入学してすぐの朝礼で、校長先生が私たちに、「皆さん、今日から3年間、自分が食べた弁当箱を洗ってください。3年間自分の弁当箱を洗い続けることができた人は、私が責任をもって高校に入れてあげます」という話をされました。

「本当に？　それで高校に入学できるなら」と思い、母に宣言して、その日から弁当箱を洗い始めました。今思うと、本当に単純でした。

順調に続いていましたが、1カ月後、友達と遊んでいて帰宅が遅くなりました。帰るなり母から、「早く晩ごはん食べなさい」と言われ、食べ終わってお風呂に入り、テレビを見て、寝る前に明日の準備をしておこうとカバンを開けると、洗っていない弁当箱が出てきました。

その時、「今日で洗うのはやめようか？ 校長先生はああ言われたけれど、本当に高校に入ってもらえるかどうか分からないし…」と、理由をつけて、やめようとしている自分がいました。

続ける途中には、諦めたい自分を正当化しようとする感情が、しばしば立ちはだかります。しかし、親に3年間弁当箱を洗うと宣言した手前、1カ月しか続かない恥ずかしさと、やめた

い気持ちとで葛藤した結果、洗うことを選択しました。中学生なりのプライドが勝ち、何とか乗り越えられたのです。

それから1年経った頃には、無意識にできるようになりました。初めは意識してやっていたことが、朝起きれば歯を磨くように、家に帰れば弁当箱を洗っている自分がいました。

当初、勉強せずに高校へ行けるならと始めましたが、2年目になると、「校長先生が教えたかったのは、『継続の大切さ』ではないか。弁当箱洗いても、風呂掃除でも何でも良くて、何かを続けることで、生徒に根気や忍耐力を養ってほしかったんだ。3年間続けたら高校に入れてあげるという言葉は、希望を持たせるためだ」と思うようになりました。続けていく中で、校

長先生の真意に自ら気づいた瞬間でした。以来、中学・高校の6年間続けることができ、今も弁当箱は自分で洗っています。

私は今まで、継続を通してたくさんのことを学びました。本で読んだり、人から聞いたり、頭で覚えた内容は忘れることもありませんが、自らが体験し、体で覚えたことは忘れません。

まずは形から入りながら、だんだんと事柄の本質に迫り、見えていなかった世界に気づいていきます。

私自身、毎日弁当箱を洗うことで、母がいつも私の体のことを思ってお弁当を作ってくれていることに気づき、深い愛情と祈りを感じることができました。

私は現在、高校の教師として宗教の授業を受

け持っていますが、子どもたちには、「世と人のお役に立つ人になってほしい」という願いを持ちながら授業にあたり、子どもたちのこれから先の人生に何か一つでもお役に立てますようにと祈りながら授業を続けています。

今は分からなくても、いつの日か分かってほしい内容を授業に取り入れるようになったのも、願いを持つようになったからです。

校長先生の思いや母の思いに気づけたことも、今、子どもたちのことを願い続けることができているのも、継続の中でこそ学ぶことができたおかげだと思っています。

今は、何もしていないという人も、運動でもお手伝いでも、ちょっとした趣味でも、生活の中で何か一つでも続けることができたなら、き

っとたくさんのことを学ぶはずです。そして、それはきつと、一生の宝物になると思います。

何事も、やる前から諦める必要はありません。

明日からと言わず、今日から、今からです。

（案内役）いかがでしたか。私は、ムラが多く、続けることが苦手ですので、このお話が、強く胸に刺さりました。

教祖様のみ教えに「ものは、細うても長う続かねば繁盛でないぞ。細い道でもしだいに踏み広げて通るのは繁盛じゃ」とあります。このみ教えは、まだ舗装されていない細い道でも毎日毎日往復していますと、だんだん道が広がっていきます。通るのをやめてしまうと、また草がいつぱい生えて、道を覆ってしまうでしょう。

怠け心を出さずに歩き続けることが、いつのまにか広い道、繁盛になるということだと思ふのです。丹羽さんの仰るように、「まずは形から入りながら、だんだんと事柄の本質に迫り、見えていかなかった世界に気づいていきます。今見えている世界には、必ず先があります」ということなのでしょう。人生の宝物は意外とすぐそばにあるのかもしれない。

《信心ライブ》

「気づく力」

(ナレ) おはようございます。今日は、熊本県・肥後浜町教会の橋本信一はしもとしんいちさんが、令和6年7月に、金光教本部でお話しされたものをお聞きいただきます。

(橋本) 信心の醍醐味は何か。私はですね、気づく力、「あーそうだったのか」と気づいていく。そういうことが大事なんじゃないかな、このように思っております。

若い時には分からなかったけれども、年齢を重ねてだんだんと分かってくることがあると思います。あるいは、健康な時には全く気づかな

かったけれども、病気になって初めて健康のありがたさが分かる。日常の生活の中で、少しずつそういうことに気がついていく、これが信心の上でとても大事なことではないかなと思うわけであります。

一つ、私の失敗談といいますか、例を申し上げます。私の在籍教会は、九州の熊本県山間部の過疎地にございます。のどかな所で教会の裏手には少しばかりの畑がございす。その家庭菜園の少し先には、榊さかきの木が植わっております。この榊の木は、教会のお祭りの時にですね、玉串たまぐしとして用いております、私はそれを大切にですね、手入れをし、育てさせていただいております。

ある時、畑で作業してありましたら、どうも

その榊の木がおかしいんですね。どうも、所々枝が折れているんです。誰かがいたずらをしておるような、そんな感じだったんですね。また別の日に行きますと、やはり枝が折れとるんです。これは絶対誰かがいたずらしとるな、神様の御用にお使いさせていただく大事な物、いたずらして「けしからん」と、こう思うんですね。その人を見かけたら注意してやろうと、そういう気持ちになっておりました。

そしてしばらくして、榊の木の前に一人の男性が立っております。私よりちよつと年配位の男性の方でした。「そこで何してるんですか」と聞いたんです。ぐつと振り返るんですね。振り返ったその手にはですね、榊の枝を4、5本お持ちなんですよね。聞いたんですよ私。「そ

の榊はどうされたんですか」って。「向こうでもらってきた」と仰る。

しかしですね、目の前には、切り口の新しい手で折ったような、その枝が残っているんですね。そのお持ちになっている榊の枝もですね、手で折ったような。私は榊の枝を切る時は剪定ばさみを使います。私が切ったんじゃないんですね。明らかに手で折ったような。どう考えても状況証拠がそろっているといえますかね。明らかにその人が取ったんだと思ひましてですね、言いました私は。

「ここは金光教の教会の敷地なんですよ。この榊はですね、教会のお祭りに使う榊なんですよ。勝手に持って行ってもらっちゃ困ります。人の物を黙って持っていくのは泥棒でしょ、」

こう言っただですよ、私。

そしたらその男性の方がみるみる怒ってきましてね、そして「俺は泥棒じゃない」と言うて、櫛の枝を握りしめたまま敷地から出て行きました。

何とも言えない気持ちになりました。後味の悪いっていいですかね。つまりその人を怒らせてしまったんですね。あるいは見ず知らずの人に、「泥棒」って言っちゃったんですね。これは言い過ぎだなと思ってですね、あーと思いつつながら反省しながらですね、教会のお広前に行つて、「すいませんでした、ちょっと言い過ぎました」と反省しておりましたら、ふっと気がつくことがある。あーそうか、私はその男性に「泥棒でしょ」と言っただですけども、実はこの私

自身が「泥棒」だったんじゃないかな。こう思うたんですね。つまり、神様の御用、お祭りに用いる櫛だと言いながら、神様にお許しを頂かないままに、十分なご祈念もしないままに、パチパチ取っておったんじゃない、私は。それをふっと思わされたんですね。もしかしたら私もご無礼なことをとったんじゃないかなと。本当にそう思わさしてもらいました。

それ以来、櫛取りの御用をさせてもらう時にはですね、十分に神様をお願いをさせてもらつて、そして櫛取りの御用をさせてもらつておるわけであります。

ご無礼者の失敗ばかりしている私でありますけれども、気づくことがあるんですね。日常のささいなこと、普段の何気ないこと、当たり前

に思っていること、そうした中にですね、神様

のお働きはたくさんあるんじゃないかなと思います。その事柄に、1つでも2つでも気づいていく、分からせてもらう、ということがこのお道では大事なことでないかな、こう思うわけでございます。

(ナレ) いかがでしたか。

お話の中の男性が本当に榊を盗んだのかどうか、その真相は分かりません。しかし、橋本さんは、神様からご覧になれば、自分こそが「泥棒」だったと反省されました。

それは、天地の中にあるものに自分が作り出したものは何一つなく、すべてが神様のお恵みなんだということに気づかれたからなのでしょう。

う。

神様に心に向けることで、理不尽と思えることも変わって見えてきます。そこから自分を見つめ直す目が開きます。この「気づく力」を頂けることが、信心の醍醐味と言えるのでしよう。

「人生最後の試験」

大阪府・平野教会 ひらの 宮下寿美 みやしたひさみ

おはようございます。今日は、私が奉仕する金光教平野教会の三代教会長だった祖父、宮下直次先生が書き残した書物の中から、『教話集』という書籍を紹介します。祖父は、「金光教の信仰を分かりやすく伝えたい」と、何冊も本を作りました。今回ご紹介する本は、約40年前に書かれたものですが、令和の今でも「なるほど！そうか！」とはっとさせられ、心が落ち着く大切な気づきをくれます。今日は、そんな中から、「人生最後の試験」というお話をお聞きください。

*

私の感じますところを、皆様がたに聞いていただきたいと思います。

皆、学校へ行っていた時、試験があったでしょう。その試験が小学校から中学、高校それから大学と、長い間、試験で苦しんできました。

ところで、学校を卒業したら、もう試験はないかというと、そんなことはない。学校を卒業しても試験はある。銀行にお勤めの人は、その銀行の本店で、商社へ勤めている人は、商社で試験がある。学校の教頭になるのでも、試験があつて、とおらないとなれない。商売をなさっている方は、商売が繁盛していけばよいが、業績があがらなかつたら落第です。

学校を卒業したら、もう、試験はない、そん

なことはございません。なんぼでも次々に問題

があつて、試験があつて、出てくる問題を次々解決させていただいて進ませてもらうことが大切で、いつも言うように、私たちが生きている限り、問題というものはなくなることはございません。

お天気でもそうですね。風のない、あたたかい、朝から晩までよい天気、そういう日は少ない。あとは、雨が降ったり風が吹いたり、曇ったり、寒かったり暑かったり、何もいうことのないよいお天気というのは、一年の内で数えるほどしかない。

そのことは、お互いの人生においてもそうなんです。生きている限り、どこまでいっても、何もいうことはない、ありがたいということに

はなりません。

ところで、人生最後の試験が、人間の最後、人生にさよならいうとき、臨終のときが最後の試験でございます。

神様にお礼を申しあげ、お世話になった人へありがとうと言って死ぬような死に方、それが一番結構です。それは合格でございます。

そのようなことになるためには、やはり、何といつても、常日ごろです。常日ごろ考えていることが最後にでる。

よい生き方がよい死に方につながるといわれますが、それはそういうことでございます。

常日ごろから、非常に小言愚痴ばかり言っている男の人があった。その人が身体を悪くして入院した。皆が見舞いに行つて、忙しいのに、

暑い時に、まずは何はともあれ「ありがとう」と言えばよいと思うのですが、なかなかそれと言えない。やはり、それは常日ごろでございませう。

(略)

自分は大丈夫と思っていても、常日ごろ、ありがたい生活、ありがたい思いがなければ、なかなか出てきません。

ある信者の人が、亡くなる時に、チャンと、神様から家族の者はもちろん、皆にお礼を言つて亡くなった。長男のお嫁さんは、そのありがたい状に、本当に感動した。それで、私も信心させてもらうといつて信心するようになった。

ある教会の老婦人が、亡くなってから遺言状がでてきた。たいがい、遺言状といったら、普

通は財産のことや、宝石や着物のことです。

この人の遺言状は、一番はじめに、神様ありがとうございます、で始まっている。それから、教会の先生にありがとうございます。今日までお付き合いいただいた皆様ありがとうございます。続いて家族にお礼です。

遺言状を見た人々が感激した。生きておるとき、信心をしっかりとっておった。信心の真心からでた遺言状である。お礼からあと、お祈りがでている。家族仲よう、おかげをいただいでいくことを祈る。それが遺言であつた。

教祖は「生きておる間に神になりおかずして、死んでからどうして神になれるか」と、まず、生きている今、今月今日、助かつて行くことを我々に教えておつて下さいます。

生きておる間に、ほんとうに、お互いが助かり、ありがたい生き方ができたら、死んでからのことは心配しなくてもよい、というように教えておって下さいます。

※ラジオ放送用に変更を加えている箇所があります。

表記は原典に基づいています。

＊

「人生の最後にまたテストって!？」と思われた人が多かったのではと思いますが、私たちがイメージする試験とは違っていましたね。

生活をしていると、うれしいことや楽しいことばかりではありません。つらいこと、悲しいこと、しんどい、といった試練も乗り越えていかなければいけません。病苦災難に出遭っても、心を元気に整えて、ありがたい気持でいられ

ば、自分も幸せだし、周りの人も安心できる。そういう生き方ができるようになったら、素晴らしいと思います。なかなか難しいことですが、「金光教の信仰は、安心して生きるための、心のよりどころになりますよ」と、そのように筆者である私の祖父が呼びかけているように思えてなりません。

《特選アーカイブス》

「義父(ちち)の生き方を見つめて」

兵庫県・加里屋教会 井上憲親いのうえのりちか

(平成17年3月9日放送)

私は若い頃から、家族の心が通じ合って、明るく笑顔のある家庭生活を送りたいと夢見てきました。と言いますのも自分の欠点が我が強さにあり、何か問題が起きるたびに我を通し、引くことができない、そういう自分に随分苦しめられてきたからでした。妻の父も、そこを心配したのでしよう。「あんた、人と意見が合わなくとも神様にお願ひしながら、我を通さないようにしなくてはいけないよ」と注意してくれました。そして、「神様はなあ、和らぎ喜ぶ心に

なることを願ってくださっている。時には引いたり、妥協するような気持ちになることも大切だよ」と教えてくれました。私はそれを聞いて、「和らぎ喜ぶ心」になろうとすることは、なるほど大事だと思いました。しかし妥協するようない気持ちになることも必要だというのは、いったいどういうことだろうか、随分考えさせられたのです。妥協してしまえば自分の意見を主張できません。負けるような感じもします。そう思いながらも義父が言ってくれたことを大切にしたいと思い、自分の思い通りにならないことでも、神様にお願ひしながら受け止めさせていただくとうと心掛けてきました。

その義父も、一昨年の1月に84歳で亡くなり、義父自身の生きる姿を通して、いろいろなこと

を教えてくださいました。まず、不平不足を言わない人でした。66歳の時に皮膚がんを患い、両足の皮膚を、かなり広く切り取って下腹部に移植しました。それから、足の付け根のリンパ腺を全部取り除きました。それ以来、足の関節から下が腫れ、靴が履けなくなり、サンダルで外出しておりました。亡くなる5、6年前には、腫れはいよいよひどくなり、固くパンパンに膨らんで、青白くて血の氣のない、ろう人形のような足になりました。歩くことも難しくなってしまうのです。さぞ足が重たかったろう、痛かったろうと思うのですが、義父の口から、「痛い」「つらい」というような言葉を聞いたことがあります。片手で杖を持ち、手すりを頼りに、あるいは義母の肩につかまりながら、一歩

ずつ家の中を進んでいました。そして毎日神様をおまつりしてある所に行つて、家族や知り合いの人たちの健康と幸せを祈つておりました。

また、いつも感謝し人の心を和ませる人でした。車いすで病院に連れていくと、お医者さん、看護婦さんに会います。家にはヘルパーさんたちが来てくれます。そういう人たちに会うたびに右手を肩まであげ、ニッコリとあいさつするのです。別れる時も同じように「ありがとう」でニッコリ。コップ1杯のお水を持ってきてもらっても、「ありがとう」を忘れません。食事でどういう料理が出ても、「オオ」と感激の面持ちで、お礼を言いながら頂いておりました。亡くなる前の年の夏、義父のトイレの世話を終えた私の妻が、義父にズボンをはかせていた

時のことです。何か義父の足が震えているので、見上げてみたのだそうです。すると義父は足元にいる妻を見ながら震える手を合わせ、「ありがとう、ありがとう」と何度もお礼を口にしたということです。「自分が生まれてから今日までそれほどお父さんにお世話になったか分からない。それが、ほんのわずかなお世話一つで、手まで合わせてもらって、何とも言えない気持ちになり、もったいなくて涙が出た」と妻は私に話してくれました。

こうした義父の、ものの感じ方や生き方は、どこからきたものなのでしょう。義父は、第二次世界大戦の最中、輸送船で南方に派遣されました。その時、フィリピン沖で魚雷攻撃に遭い、船はあつと言う間に沈められてしまったの

です。いきなり水中深く投げ込まれ、うねりに巻き込まれ、息もできない苦しみの中、必死で神様に助けを願いながら、もがきました。「もうだめか」と思った瞬間、母の姿が目に見えだといいます。すると不思議に体が浮かんで水面に出ることができ、目の前に1枚の板切れを見つけました。それにしがみついて助かったのです。同じ船に乗っていた人たちのほとんどが海の藻くずと消え、助かったのはわずか15人だったそうです。

その後の義父は事あるごとに、その時助けられたことを思い出していたのでしょう。そして命のあること、息の吸えることのありがたさを繰り返し繰り返し神様にお礼申していたのだと思います。そしてまた、助けを求めながら次々

と波間に消えていった多くの人たちのことを思い起こし、亡くなった人たちの分も生きて、少しでも世の中のお役に立たせてもらわなくては申しわけないという思いでいたように思うのです。

ことを思うたびに私自身、人を不足に思う心に振り回されず、生かされていることへの感謝を土台に人の役に立ちたい。そう神様にお願している今日このごろです。

義父が私に諭してくれた、「時には引いたりして、妥協するような気持ちにならないといけないよ」という言葉。その言葉の奥には、「生かされて生きている喜びを土台として、和らいだ心で、全てを大切にさせてもらいなさいよ」という思いがあつたのだと思います。自分の意見や立場だけでなく、相手の意見や立場も大切にしないさい。あんたの命も相手の命も、日々神様から賜^{たまわ}っているものなのだから。義父はそう教えてくれていたのでしょう。そんな義父の

金光教本部や教会では、神様をおまつりした間を「ひろまえ広前」と呼び、氏子の願い礼場所、信心の稽古場所とされています。

広前の正面には神前があり、てん ち かきつけ天地書附を掲げ、「てん ち かね の かみ天地金乃神」
「いきがみこんこうだいじん生神金光大神」をおまつりしています。

向かって左側は、信奉者のみたま様をれいじん霊神としておまつりした霊前です。

そして、右側には、とりつぎ取次の場である、けっかい結界があります。
結界では取次者が取次を行っており、どなたでも取次を願うことができます。





金光教本部 ラジオ放送係

住 所 〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷320

電 話 0865-42-6453

FAX 0865-42-2114

メール w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

朝日放送 木曜日 あさ4時35分

放送センターHP
「こころで聴く
おはなし」



「こころで
聴くおはなし
Podcast」



放送後の音声はWebサイトやPodcastで聴くことができます。